

# THE FLUTE

MARCH  
APRIL  
2009  
98  
ISSN 1345-8809

ジュゼッペ・ノヴァ  
COVER STORY

4月号 定価(税込)  
900円



#### INTERVIEW

ジュゼッペ・ノヴァ | 荒川 洋  
南部靖佳 | 金昌国 & 神田寛明

#### NEW SERIES

ようこそ  
かわいいオカリーナの世界へ

#### SCORE

月の光  
ドビュッシー 作曲  
ありふれた奇跡  
エンヤ 歌

#### 連載企画

### ALL ABOUT FLUTE

フルート総見 ピッコロ編(後編)  
Interview | 菅原 潤

上手になりたい!  
大人のフルート

坂上領の  
聴きたい、あれこれ

フルート製作、その変遷  
The story of making flute, its transition



Cover Photo

### ジュゼッペ・ノヴァ

久しぶりのインタビューが叶ったジュゼッペ・ノヴァ氏。取材中はユーモアを交えて、ずっと楽しそうに質問に答えてくれた姿が印象的だった。表紙撮影では撮った写真をチェックするや、「全部いいね！ この写真のデータがほしいんだけど……」とリクエスト。その場にいる人の気持ちを明るくさせてくれる太陽のような人柄に、心あたたまる取材であった。  
(→Cover Story P.2)

THE FLUTE 公式携帯サイト  
<http://kmaga.jp/flute/>



# NO. 98

MARCH | APRIL 2009 4月号

## CONTENTS

<http://www.alsoj.com/flute/>

# THE FLUTE

# 謹呈

- 2 Cover Story ジュゼッペ・ノヴァ
- 7 Zoom In 荒川 洋
- 12 Spot Light 南部靖佳
- 14 LYNXのFlute Salon
- 16 《連載企画》フルート製作、その変遷  
音程への挑戦、それはW.ベネットとの出会いが始まり  
フルートという“道具”が音楽を奏するために
- 19 《連載企画》フルート総見 ビッコロ編(後編)
- 27 坂上領の“聴きたい、あれこれ”  
—オススメ名盤セレクション—
- 30 Special Talk 金昌国&神田寛明
- 34 フルード楽曲分析講座 第6回  
ウルフ=ディーター・シャーフ
- 38 フルード上達法 第24回
- 46 さかはし矢波のつれづれ放送局 さかはし矢波
- 48 CD新譜 注目のリリース/ FLUTE CD LIST
- 54 Concert Review & Information
- 67 New Products & Release
- 70 全国フルード教室案内
- 73 音楽の旅路より 瀬尾和紀
- 74 読者モニターの広場
- 76 THE FLUTE SPECIAL Vol.22で楽しもう！  
「ジャズ・フルード お気に入りのフレーズを作ろう」Miya
- 80 笛吹き、漫遊紀行 西川浩平
- 84 上手になりたい！ 大人のフルード  
—チャレンジへのトビラ—
- 95 ようこそ かわいいオカリナーの世界へ  
ナビゲーター：山城奈奈子
- 101 読者のコーナー

### Staff

Editor 大久保由紀  
宮内順子  
吉野由紀子  
丹野由夏  
古田哲也  
鬼木玲子  
Design 上原浩嗣  
山口美奈  
儀周作  
P a p i 4  
Photo 草野裕  
DTP ㈱ M B S  
Printing 日本ハイコム

### Ensemble Score

月の光 (2Fl&Pfl)  
[C.ドビュッシー 作曲 石毛崇徳 編曲]  
ありふれた奇跡 (4Fl)  
[エンヤ 歌 鈴木智平 編曲]



Giuseppe Nova ジュゼッペ・ノヴァ

アオスタ音楽院教授、アルバ音楽祭芸術監督、  
2008年びわ湖国際フルートコンクール審査員、  
2008年京都芸術祭賞受賞

# すべてのことに対してオープンであること

Cover Story  
*Giuseppe Nova*  
ジュゼッペ・ノヴァ

イタリアから来日したジュゼッペ・ノヴァ氏。イタリア人気質のまま、明るくユーモア溢れるその人柄に惹かれて、日本でも氏のマスタークラスを受けたいという受講生が多く集ってくる。2008年11月から12月にかけて、大嶋義実氏、あうろすフルートあんさんぶる+フルートアンサンブルSAKURAJeuneと、イタリアではアルバ音楽祭、日本では京都芸術祭にて共演。この公演を企画し、指揮も行なった白石孝子氏にインタビューをお願いし、ノヴァ氏の音楽人生を聞いた。

インタビュー:白石孝子 通訳:榎原敬幸  
取材協力:ドルチェ楽器管楽器アヴェニュー東京



## 音色、息の流れを知ること

— 今回で何回目の来日になりますか？

**ジュゼッペ・ノヴァ (以下N)** う～ん……、7、8回目になると思います。かなり頻繁に日本を訪れていますね。

— 2000年にもインタビューをさせていただいていますが、その後どのような変化がありましたか？

**N** あの時よりも歳をとりましたよ！(笑) 音楽家としてのキャリアは順調に進んでいますし、ヨーロッパ内だけではなくアメリカ、日本そしてタイなど、たくさんの国を訪れて演奏したり……、いろいろな経験を積む機会があり、活動は多様化してきています。

— 前回のインタビューでフルーティストとして一番大切なのは「音色」だとおっしゃっていましたね。

**N** その考えは今も変わっていません。ヴァイオリンなどの弦楽器と違って、フルートには楽器そのものに共鳴体となる部分がありません。当然奏者の体が共鳴体の代わりをするわけですが、特に若いフルーティストに多く見られる現象として、楽器を鳴らそうという意識が強すぎるあまりに力を使い過ぎ、その結果、音色を損ねているように思います。楽器を良く鳴らす、というのはもちろん肉体的なテクニックに基づくものですが、音楽を離れて絵画を見たりしながら、「色」というものに関する感覚を研ぎ澄ませていく必要があると思います。当然、名のある巨匠の演奏を聴いて音色感を養うことも必要ですが、自分の求めるもの、あるべき姿を考えながら、そういった勉強をいかに自分の将来に反映させていくかが重要ですね。

またフルートという楽器は自分の吐く息そのものが音として表れる素晴らしい楽器ですから、たくさんの歌手の演奏を聴いて参考にしよう、自分の生徒たちにはいつも薦めています。例えばモーツァルトのコンチェルトを演奏する時、彼の偉大な功績であるオペラを聴かすして彼の音楽を理解するのは難しいことです。オペラの中での役柄ごとによる個性、音域などを考慮しながら、それをフルートの曲にも当てはめていく必要があります。時にはバリトンが壮大に歌うように、また時にはソプラノが華麗に、といった具合に……。音色だけではなく音量に対する感覚など、いろいろな発見があるはずですよ。

日本には墨絵など、独特の伝統を持った芸術がたくさんありますし、日本人々はそういった感性に優れていると思います。また楽器そのものに関して、過去の偉人たち——ゴッベルやモイーズが使っていたころの楽器とは、比べものにならないような優れたものが毎年のように発表されています。これだけ楽器に技術的な制約がなくなった今、それを

最大限に活用して、さらに先にあるもの——音楽的な表現や自分の感性を聴衆と共有することなど、たくさんのごことに気を配っていく必要があると思います。ただ技術的に完璧、というだけではなくてね。

— そのためにはどういった練習が有効ですか？

**N** ほとんどすべての人たちに言えることですが、練習中のもっと多くの時間を音色の追及のために費やすべきです。そして同時に出来るだけたくさんのごことに気を配るのです。フィンガリングなど、解りやすい技術的な部分ばかりが気になってしまうのも十分理解できますが、それだけでは不完全なのです。

例えばランバルが言っていた「スケールの練習は指のためではない、音色のためなのだ。どれだけ完全に指が動いても、音色が伴わなければ無意味な練習になるだろう」という言葉が正にそうです。練習時にはまずフィンガリング、次に音程の練習、そしてエチュード、とどうしても小分けにして考えてしまいがちですが、単純なスケールの練習でもそのすべてを同時に練習することは可能なのです。そのほうが時間の節約にもなりますね。またそうしてすべてを複合的に捉えることにより、自分の体の動きについてももっと深い理解を得ることが出来ます。

他にはフルートとは違う楽器を見て参考にするのも効果的です。フルートの息の流れというのはとても把握しにくく、目には見えないものですから、弦楽器のボウイングを思い浮かべながら演奏したりするのも良いと思いますよ。例えば高い音に上がる時には楽器が上がって、低い音にいくときには体が下がる、そんなフルーティストをよく目にしますが、弦楽器奏者と比べてみるとそれが音楽的に不自然なのは一目瞭然ですよ。

## 音楽家として向かうべき姿を見つける

— 昨日のレッスン(2008年12月20日にドルチェ楽器管楽器アヴェニュー東京で行なわれたマスタークラス)では頻繁にAperto!(もっと開いて!)とおっしゃっていましたね。

**N** ええ、たくさん言いました！(笑) 口の中や喉を開くことに問題がある人には、そのフレーズを声に出して歌ってもらいます。中には声を出して歌うことに抵抗がある人もいますが、もしフレーズを正しく歌おうとすれば、体は即座にその状況に即した状態に変化するはずですよ。喉を締め付けたり、強い力をかけたまま普通に歌うことは出来ませんからね。また声を出して歌うことにより胸部にかかる不必要な力も取り除くことができるので、その後フルートを持って同じように吹けば必ず良い結果が得られます。





またヴィブラートに関しても同じです。絶え間なく流れ続ける息、呼吸にヴィブラートを上手くかけるためには不必要な力を加えるべきではありません。息の流れに対して自然なヴィブラートを得るためにも、是非声を出して歌ってみてください。そしてすべての練習に通じることですが、画家が一筆加えることに離れて眺めながら次の一筆を考えるように、絶えず自己解析をして、客観的になる必要があります。

—— 今回の来日では、20人以上の受講生にレッスンをされたそうですが、ご感想は？

N とても素晴らしいかったですよ！日本だけではなく、世界中でまだまだフルート演奏のレベルは上がり続けていると感じています。昔に比べればたくさんの録音を聴いたり、有名な演奏家のマスタークラスに参加したりすることが容易



氏の愛用する19.5Kゴールド、リング、C足部管、C $\sharp$ トリル・キィ付きのフルート

になってきています。それによりたくさんの選択肢の中から、自分にとって必要なものを見つけやすくなっているのは良いことだと思います。知識だけに限って言えば、とても高いレベルから勉強を始められますしね。当然今の時代のほうが、より自分が音楽家としてあるべき姿、そして向かう方向がわかりやすくなっているはずですよ。歩きながらでも携帯プレーヤーで素晴らしい演奏が聴ける時代ですからね！

—— 一番好きな作曲家は誰ですか？

N やはりJ.S. バッハですね。曲の構成や求められるアーティキュレーションの多用さももちろんですが、バロック時代の作品は、何れにせよダンスがベースとして成り立っている曲がほとんどですから、曲の中に身体的な動きの楽しさを見出すことも出来ます。また特にフルートの特性が上手く生かされている曲……、エネスコやデュティユーなども好きな作曲家です。

私はスペシャリストではありませんが、現代曲も多く演奏します。すべての曲がそれぞれの時代では現代曲だったわけです。それらを演奏し、後世に残すべき曲を見つけ出すプロセスはプロのフルーティストとしては欠かせないものですから。特にフルート演奏の新しい可能性、現代奏法と呼ばれるものを見つけ、発展させていくのもフルートにとっては重要な事柄でしょう。重音やノイズを伴った奏法など、まだまだ「音楽」として使える要素を今以上に模索するべきものはたくさんありますよ。

—— 現在お使いのフルートを教えてください。

N バウエルの19.5Kゴールド、リング、C足部管、C $\sharp$ トリル・キィ付きのフルートです。頭部管はパウエルのポストン・タイプとラファンのアドラー付きの両方を使い分けています。この楽器を使い始めてからもう数年経ちますが、独特の深みが気に入っています。とても自分の好みに合っていますね。普段はC足部管を使っていますが、あくまでも個人的な好みです。C $\sharp$ トリル・キィはヨーロッパではまだアメリカほどにポピュラーではありませんが、あると便利な機能ですね。また、以前カメラータ・トウキョウで録音したCDではヤマハの木管を使用しました。

ただ楽器というのはあくまでも表現のための道具であり、それ自体がゴールではないのです。それが金であれ、銀であれ、あるいは木管であれ、その人の好みに合えば結局は何でも良いのだと思います。

ラリュエとマリオンが導いたフルート人生

—— 昨年11月と12月に日本のフルートアンサンブルと共演をされましたが、イタリアにおけるプロのフルートアンサンブルの状況はいかがですか？



**N** 残念ながら、日本ほどには発展していないですね。実際「プロのフルートアンサンブル」と演奏したのは昨年が初めてでした。同じフルートとはいえ、ピッコロからコントラバスフルートまで、バラエティに富んだ音色が楽しめて素晴らしい経験でした。普段はフルートアンサンブルとは言ってもせいぜい普通のフルートとアルト・フルートくらいですから。日本の方々はとても真剣に取り組んでいますし、ヨーロッパのフルーティストも見習うべきだと思います。

——現在のイタリアフルート界についてお聞かせください。

**N** イタリアは地理的に他の国からの影響が少ないこともあって、昔はフルート演奏だけではなく、教育の面でもそれほど発展していませんでした。しかしこの10年ほどですごく発展してきたと思います。20年前のイタリアではハイレベルなソロ・フルーティストといえばほんの数人しかいなくて……。今はイタリア国内にも素晴らしいフルーティストがたくさんいますよ。この雑誌と同じようなフルートの専門誌も出来て、若い人たちにとっての環境は整ってきているのではないのでしょうか。ある意味自分たちの世代がイタリア・フルート界のバイオニアだと自負しています(笑)。

——ではノヴァさんはどのようにしてキャリアを積んでこられましたか？

**N** 今でも充分若いと思っているんですよ(笑)！

イタリアで学校を卒業した後、どうしてもマクス・ラリュエのフランス流の教育を受けたいと思ってリヨンのコンセルヴァトワールの入試を受けました。当時ラリュエはリオンとジュネーブの二校でレッスンをしていたのですが、リオンは国立の学校で授業料がほぼ無料だったので、大抵の生徒はまずリオンを受けに来ていました。入試を受けに行ったら受験生が100人もいて、さすがに驚いたのを覚えています。

フランスでは不正を防ぐために、教授が自分のクラスの入試の試験官をつとめることは禁止されています。私が受験したときに試験官として聴いていたのがアラン・マリオンでした。ただ私はその時までマリオンに会ったことがなくてね。私が試験後に近くのカフェにいたら「トレヴィアン！」と言いながら近づいてきた見知らぬ人がいて、それがマリオンだとうまく知りました(笑)。

幸運なことにラリュエのクラスに入れ、数年後にイタリア北部のサルツォ音楽院でマリオンが教鞭をとるようになったときに彼のアシスタントとして呼ばれました。イタリア人で、フレンチスクールを教えることが出来る、という意味で私が適任と思われたのでしょう。そしてリオンでのクラスを終わった後にはラリュエのアシスタントとしても働きました。その後、彼とは師弟関係だけではなく友人として付

き合うようになり、一緒に録音も行なっています。

——ラリュエ氏のレッスンについてお聞かせください。

**N** とてもシンプルですよ！ 技術的なことにはあまり拘らず、音楽面に集中したレッスンでした。彼の演奏は……高いレベルでの長いキャリアに裏付けされた完璧な、素晴らしいものでした。自分に多大な影響、インスピレーションを与えてくれましたね。またレッスンでの彼はとても優しく、いつも生徒がリラックスして良い演奏が出来るようになっていました。生徒に何かを強要することはまったくなく、たとえ僕が準備不足でレッスンに望んだ時でも、「次回はちゃんとやってくるんだよ〜」と言って、機嫌を損ねる素振りすら見せませんでした。そのおかげでレッスンを負担に感じることは一度もありませんでしたね。



インタビュー 白石孝子 | PROFILE 元京都市交響楽団フルート奏者。京都市立芸術大学、相愛大学、京都市立高校各講師。近年は指揮者としても活動。京都芸術祭、びわ湖国際フルートコンクールを創設し、実行委員長も務める。

——ノヴァさんの今までの音楽家人生で最も重要だったと思われることは何でしょうか？

**N** やはり何といっても、素晴らしい先生に出会えたことです。特にマクス・ラリュエ、アラン・マリオンの二人ですね。彼らの下で非常に高いレベルに身を置き、フルートの勉強に集中し、一個人の音楽家として自分を磨く経験が出来たのは本当に幸せでした。それは特別に感銘を受ける出来事でしたが、そういった感覚は音楽生活からのみ得るものでもありません。昨日、大阪から東京に向かう途中に見た富士山がとても綺麗でした。そういったことから受ける感銘も、自分には大きな影響となります。音楽、フルートだけではなく、すべてのことに対していつもオープンでありたいと思っています。

——これからのご活躍を楽しみにしています。本日はありがとうございました。